

一般社団法人

## 東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.46 (2022年8月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 3-6

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所久万田研究室気付

<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>

MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

### 【第78回定例研究会記録】

日時：2022年7月16日(土) 13:30~15:30

オンライン開催 (Web会議ツール Zoom)

「特別テーマ：沖縄における劇場と芸能の創造」

#### 【講演】

小越友也

(がらまんホール・アートマネージャー / 非会員)

「沖縄におけるメディア統合型舞台創造の実践  
—現代芸能「獅子と仁人」—」

#### 【座談会】

モデレーター

古謝麻耶子 (沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員)

コメンテーター

久万田晋 (沖縄県立芸術大学芸術文化研究所)

丹羽 梓 (一般財団法人地域創造公共ホール邦楽活性化  
事業サブコーディネーター / 非会員)

小川恵祐 (沖縄支部参事)

#### ■講演要旨

本講演は、沖縄県立芸術大学芸術文化研究所紀  
要『沖縄芸術の科学』(第34号)掲載の拙稿

「沖縄におけるメディア統合型舞台創造の実践—  
現代芸能「獅子と仁人」 in がらまんホールを事

例に—」の内容をもとに、がらまんホールが取り  
組んだ「現代芸能」と銘打つ新しい試みについて  
取り上げながら、コロナ禍における劇場の状況と  
可能性について講演を行なった。

宜野座村文化センターがらまんホールは、沖縄  
本島北部、宜野座村にある。開館は平成15  
(2003)年、私はその2年後より在職し、現在は  
アートマネージャーを務める。がらまんホールの  
運営形態は行政直営方式で、私は専門人材として  
委託管理責任者の立場で行政から業務委託を受け  
ている。がらまんホールは現在、職員3名(委託  
管理責任者、事務員、広報宣伝デザイナー)と宜  
野座村文化のまちづくり事業実行委員会(事務局  
はがらまんホール)で自主事業を行っている。事  
業内容は、コンサートから、劇場の枠にとらわれ  
ない美術展やフェスティバルまで多岐に渡る。本  
講演では「新しい広場」というキーワードを念頭  
に、「input と output」「内部評価、外部評価」な  
どを元に展開していることを紹介した。

2020年からは新型コロナウイルス感染症の影  
響で事業が停止した。同年5月、私が何気なく  
「劇場で前後2メートルを空けて座るとどうなる  
のだろうか」と写真を撮影し SNS に投稿したと  
ころ、様々な媒体で拡散されインターネットの凄  
さを体験した。その後も、集客できない状態が続  
き、やがて映像やテクノロジーの分野に活路を見

出せないか試行錯誤を始めた。

(文責：小越友也)

たとえば、がらまん YouTube チャンネルを立ち上げ、「ライブ配信」「AR を用いた映像作品」「文化講座」「無観客舞台収録」などを行った。劇場空間は、舞台装置、音響、照明といった専門的な機器が設置され、それら进行操作する技術や手法、人的資源は揃っている。ただ、映像の扱いは、プロジェクターなど映像を output する機材があるのみで、収録用の機材や技術も含め、ほとんどない。ほぼゼロからの作業は、まさに暗中模索で苦労を極めたが、劇場が作れる映像とは、劇場の魅力の人々に伝える手段、媒体としての作品ではないか、ということに気がついた。「あの劇場に行ってみたい」、「あのパフォーマンスを生で見てみたい」となるような、次につなげるための映像制作・コンテンツ配信が、劇場には必要だと考えが辿り着いた。

現代芸能「獅子と仁人」は、劇場舞台での上演・有観客を想定し、新たな獅子舞を創作する予定だったが、コロナ禍となり無観客・映像配信となった。これまで劇場空間は、観客とパフォーマーとがその瞬間を共有することで成立する場であったが、映像配信となると画面越しに見る観客へどのようにすれば劇場の雰囲気届けられるか課題が残った。そこで演出家は、AR（拡張現実）テクノロジーを付加し、鑑賞者に獅子の立体感、劇場の臨場感やリアル感をより持ってもらい、加えてリアルタイム配信をすることでその課題を乗り越えようとした。そのために、これまで劇場とはあまり関りのなかったシステムエンジニアやプログラマーが、劇場の専門技術者と一丸となって作品を制作することになった。これは、がらまんホールとしても初の試みであった。

伝統芸能とテクノロジー、新しい人々（技術者やパフォーマー）とのつながりによって生まれたこの舞台を、私は「現代芸能」とよびたい。そこでは今までになかった新たな表現方法や鑑賞方法が生まれ、劇場の新たな可能性を感じさせてくれるものだった。



(小越友也氏による発表)

### ■座談会記録

本座談会は、沖縄県内の劇場を拠点に活動を展開するアートマネージャーを講師として招き、その経験や知見を共有し、研究者と実践者がともに「沖縄における劇場と芸能の創造」について議論する場として設定したものである。議論は小越氏の内容を受けてモデレーターの古謝が約1時間の議論を進行した。

はじめに、参加者から講演中の「新しい広場」という用語の定義について確認する質問があった。つづいて、3名のコメンテーターが、自己紹介を含めながら小越氏の講演に対する意見や疑問点を述べた。小越氏が応答するとともに、さらにその他の参加者からも積極的に質問や感想があったが、議論が発展したところで時間が迫り、最後にモデレーターが総括した。

なお、本講演に係る同氏の研究紀要『沖縄芸術の科学（第34号）』は、紙面のほか沖縄県立芸術大学芸術文化研究所ウェブサイトでも閲覧できる。ぜひ参照されたい（本稿末尾にURLを掲載）。

では、各コメンテーターの発言を整理する。はじめに久万田氏から、がらまんホールの活動が非常に多面的であり、「一種のエスノグラフィックな方法ではないか」と指摘があった。映像人類学との関連性も見出すことが可能で、コロナ禍にオンラインやリモートを数多く行った自身を含む研究者にとっても大いに参考になると評した。

つづいて小川からは、同ホールの取り組みが社

会との相互関係を目指す応用音楽学的手法だと言えるのではないかと述べた。その上で、アーカイブの専門家としての研究者がどこまで劇場に対して介入の余地があるかと疑問を提示した。また、小川自身が沖縄県内の公共ホールに勤めていた経験から、必ずしも全ての劇場においてコロナ禍ならではの取り組みを行わなかった、あるいは行えなかったなかで、同ホールの先駆的な実践を行うにあたってはどのような行政的な手続きや説明責任があったのかと問いを投げかけた。

最後に丹羽氏が自己紹介を交えていくつか問題を提示した。丹羽氏は琉球大学を卒業し、現在は神奈川県に在住する。フリーランスの企画制作者として全国的に活動しながら、大学院で公共ホールについての研究も進めている。本座談会のテーマに造詣が深いため、今回オンラインをとおしてゲストコメンテーターとしてお招きした。

丹羽氏は、自身が勤めていた横浜市鶴見区サルビアホールや、日本で最も歴史ある公共ホールの一つである神奈川県立音楽堂の事例を紹介した。また全国の公共ホールの事業においては、クラシック音楽が最も多く実施されている一方で、日本の伝統音楽や古典芸能の事例は少ないという。だからこそ、がらまんホールにおける伝統芸能の取り組みは先駆的な事例ではないかと改めて言及があった。その上で、先駆的な実践にあたって市民や行政の間でどのような合意形成があるのかという質問があった。

丹羽氏のこれまでの実績の紹介や劇場に関する統計的情報の提供に対しては、会場の参加者からも積極的に質問があがった。同時に、他のホールと比較相対化することで、がらまんホールの特徴がさらに浮き彫りになった。

ここでモデレーターは3名のコメンテーターの発言を振り返り、小越氏に対論を求め本座談会のテーマの1つであった「沖縄における劇場」という議論へとゆるやかに拡張し展開された。

まず、久万田氏のエスノグラフィックな手法という意見については「(そのような表現は)逆に新

鮮」だと応じ、その上で、劇場の課題は専門家がないことであると強く言い表した。「劇場のあるべき姿としては、地域の人々を無視して何かやることは絶対にできない。美術展は美術館が地域にないからやるのであって、テクノロジーも同様」だという。しかし一方で、地域にアンケートを行うと大衆的なパフォーマンスをやってほしいという声が少なくない。だからこそ劇場には、税金を投じるのに適切な事業とはどのようなものかを、地域のニーズを踏まえた上で精査する専門家が必要なのだと説明した。

また、小川および丹羽氏が挙げた説明責任や合意形成について改めてモデレーターが問うと、小越氏は立ち上げ当初の驚くべきエピソードから話を切り出した。すなわち「職員は1人。インターネットも繋がってなく、モノクロのコピー機があるだけ。年間予算は200万円のみ」。しかしながら、劇場には多くの優れた機材があった。それに、村の条例は幅広い解釈が可能な内容であったため「自由でジャンルに縛られない」活動ができたという。その意味で、専門家の不在は「公共ホールの最大のメリットでもあるし、デメリットでもある」と皮肉交じりに話した。それでも「別に予算が降ってくるわけではない」ので、企画提案や報告書作成を協働することで、また村議会議員や地域の婦人会にその成果を直接伝えることで、内側と外側から行政に対してアプローチし「実際の肌感覚で」評価を獲得していったという。またテクノロジーについては、実は企業誘致に結びつけることも目指しており、都市政策的な観点からアプローチしていかないと行政からの信頼は得られないとも話した。以上のように地域や行政からの信頼を少しずつ獲得した過程を端的に語った。

最後に参加者から広場の機能と芸能のそれは不可分な関係だった中で、劇場が「新しい広場」だとするならば、そこでは芸能がどのように発展していくのか、という内容が問われた。この問いが、本座談会のもう一つのテーマ「芸能の創造」という議論を発展させた。

小越氏は前述の『現代芸能「獅子と仁人」』で素材とした伝統的な獅子舞について「(その芸能が成立した) 当時は最先端のエンターテインメントだったんじゃないか」と考えたという。そのような視点から、伝統芸能の保存継承のために、テクノロジーを用いて新しいものを取り入れることで「今の若い人たちも振り向いてくれる」ことを構想したのだった。それを受けて、久万田氏はアーカイブの性質について触れながら次のように論じた。たとえば100年前に成立した芸能に対して想像力を巡らせることは、逆に100年後にも通用する。すなわち「過去のパフォーマンスと未来のパフォーマンスは変換可能」なのだという。そういう意味で、がらまんホール「現代芸能」の取り組みは新たな魅力を未来に向けて発信していることになるのだと述べた。

本講演および座談会をとおして、文化の担い手とは誰なのか、という問いが筆者のなかで生じた。劇場におけるパフォーマンスは、もはやそれを演じる能力をもつ者だけにとどまらず、市民や行政、観客、テクノロジーを活用する技術者、そして小越氏のように劇場を担う人がいる多様で複雑かつ政治的なコンテキストのなかで成立していた。それは研究者が対象を俯瞰的に捉えることをさらに困難にさせるだろう。伝統的な音楽芸能が脈絡変換によって「創造」される。そのような豊かな矛盾を育む土壌としての機能が、劇場の可能性の一つだと言えるのではないだろうか。

(報告：小川恵祐)



(オンライン開催の様子)

#### ●参考資料

・沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 HP「紀要バックナンバー 34号」

<http://www.ken.okigei.ac.jp/kiyou/pg144.html> (2022年8月15日参照)

・YouTubeチャンネル”Garaman Hall”

<https://www.youtube.com/c/GaramanHall> (2022年8月15日参照)

#### ●お知らせ

次回、第79回定例研究会は2023年2月を予定しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先を明記の上、12月末までに沖縄支部(okinawashibu.toyo@gmail.com)まで、メールでお申し込みください。

発表希望のメールを送信後、1週間を経ても沖縄支部から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。次回の開催方法は、コロナ等の状況を鑑み検討いたします。

(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.46 編集委員

遠藤美奈、小川恵祐、古謝麻耶子

多和田真理、長嶺亮子

次号 No.47号は2023年3月に発行予定